

購読者に電子メールで送信したものをそのまま掲載しています。等幅フォントでお読みください。

< C U E > 利用教育委員会通信 第 63 号 (17 巻 3 号) 2006. 10. 31 発行

■■■■ ■ ■■■■ 利 用 教 育 委 員 会 通 信
■ ■ ■ ■ ■ 日 本 図 書 館 協 会 図 書 館 利 用 教 育 委 員 会
■■■■ ■■■■ ■■■■ JLA The Committee of User Education

- ・ 「< C U E > 利用教育委員会通信」は、日本図書館協会図書館利用教育委員会の最新のニュースをお伝えするメールマガジンです。
- ・ < C U E > とは、Committee of User Education の頭文字です。英語の「cue」はスタートの合図の意。利用教育の普及への願いを込めた誌名です。
- ・ 利用教育関連の情報をお寄せください。
- ・ メールマガジンに関するご意見、ご要望はこちらへ。cue@jla.or.jp

□ 目次

- (1) 第 8 回図書館総合展フォーラム講演会のお知らせ
- (2) 関連テーマ活動
- (3) 第 8 回図書館利用教育実践セミナーの報告
- (4) 図書紹介
- (5) 図書館利用教育文献一覧 (2006 年 6 月～2006 年 10 月発行分)
- (6) 編集後記
- (7) 利用教育委員会委員

(1) 第 8 回図書館総合展フォーラム講演会のお知らせ

● 2006 年 11 月 22 日 (水) 15:30～17:00

情報検索指導における良い例題・悪い例題 (中級編)
— 専門分野別データベースの特徴を紹介する方法 —

● 講師：仁上幸治氏 (早稲田大学図書館)

今、大学では、書誌データベースや電子ジャーナルの存在を知らない、

使い方がわからない、せっかく論文リストを入手したのに所蔵検索ができないという学生・院生が実に多い。その結果、図書館のレファレンス窓口は、初歩的な案内指導に追われ、ILL 複写取寄申込に対して、「当館所蔵あり」「電子ジャーナル全文閲覧可能」という差戻し回答を延々と反復せざるをえなくなっている。

また、巨額なデータベース費の投資効率の低下は、大学にとっては深刻な経営問題であり、学生・院生の文献調査能力の低下は教員にとっては教育指導の前提の崩壊である。

このような無残な状況にあって、窓口での個別対応の努力とは別に、大学教育のレベルで、情報リテラシー教育関連科目やデータベース講習会、eラーニング教材の充実など、情報検索の学習機会を増やし、理解度・習熟度を向上させる対策が必要であることは間違いない。

ところが、いざ教材コンテンツを作るとなると、電子ジャーナルの購読契約条件の複雑さや、専門分野によるニーズの違い、利用者側の情報リテラシーレベルの差など、考慮すべき要素が多すぎて、適切な例題を用意することが非常に難しくなっている。

しかし、複雑な仕組みをわかりやすく説明することこそが指導サービス専門職の存在理由である。好評をいただいた前回の初級編「素材を集め問題を作り要点を説明する方法」に続き、今回は大学高学年・大学院生向けのデータベース講習会を取り上げる。実演を通して例題の作り方のコツを楽しくマスターしよう！

■会 場：パシフィコ横浜 アネックスホール 第6会場 (F206)

<http://www.pacifico.co.jp/>

■対象者：図書館職員、教職員、JLA 会員、利用者団体ほか

■主 催：日本図書館協会

■参加費：会員 500 円／非会員 1000 円

■申 込：下記の申込書にご記入のうえ、JLA 事務局宛に電子メールでお申し込みください。宛先：cue@jla.or.jp

■定 員：170 名（先着順受付）

■締 切：11 月 15 日（水）

■詳 細：利用教育委員会ホームページ：<http://www.jla.or.jp/cue/>

「インターネット活用講座から公共図書館の利用教育を考える」と題して、去る10月13日（金）19:00-21:00（日本図書館協会2階研修室）にて、斎藤誠一氏（千葉経済大学短期大学部）を講師に迎え開催されました。一般参加者は38名でした。

公共図書館の事例は、今回が初めてでしたが、多くの公共図書館関係者の参加があり、感心の高さを伺わせたとともに、今後の積極的な展開の必要性を感じました。

講義内容は、日常のレファレンス活動からインターネットを活用した利用教育の必要性を感じたという動機付けから始まり、「インターネット上の情報活用講座」の中で紹介されたサイト例が具体的に取り上げられました。(1)サイトの紹介方法、(2)情報に対する評価方法、(3)検索エンジンの賢い使い方など、実際のレファレンス処理体験やエピソードを織り交ぜながらの話は、かなり分かりやすい内容でした。サイトは、初級レベルと中級レベルを混在した形で紹介されました。

今までのセミナーは、大学図書館、専門図書館的な要素が強く、どちらかといえば、資料収集に重きが置かれていましたが、今回は、公共図書館のレファレンスの特性を反映した「事実調査」に使えるサイトが多く、一味違ったセミナーでした。

終了後のアンケートも大変好評で、多くの参加者の方々には、良い手本になったのではないかと思います。

（毛利和弘／亜細亜大学）

(4) 図書紹介

図書館利用から読解力(読解リテラシー)の向上・開発が始まる
—多様な辞書を活用する場としての学校図書館—

- (A) 『7歳から「辞書」を引いて頭をきたえる』深谷圭助著、すばる舎、2006.9、255p.
- (B) 『フィンランド国語教科書 小学3年生—日本語翻訳版 フィンランド・メソッド5つの基本が学べる—』メルビル・バレ、マル

ック・トッレネン，リトベ・コスキバ著，北川達夫，フィンランド・メソッド普及会訳，経済界，2006.5，93p.

(C) 『スウェーデン式アイデア・ブック』フレドリック・ヘーレン著，中妻美奈子訳，ダイヤモンド社，2005.3，95p.

辞書を引いて語彙力を増大させ，考える力を伸ばすというのは，昔から小中学校で行ってきたことで，特に新しいアイデアではない。このような本が新しい教育法であるかのようにして，特別に宣伝して（大きな新聞広告が掲載された），発行されるのは，教育の環境が激変していることの表れであろう。

小学校の国語教科書では，3年生にならないと、辞書の引き方が出てこない。その結果，調べるために「便利な七つ道具」の中に，ファイルはあるが，辞書は入っていない。「図書室へ行こう」（「図書館」と表現すべきであろう）という特別ページがあるが，「読書の広場」という扱いで，調べる場所という位置づけではない。教科書に載っていないくても学習することは可能であるが，ほとんどの授業は教科書中心で行われているようである。

「小学1年生に辞書を使わせよう」と考えた深谷先生は，刈谷市立亀城小学校に着任した1987年に辞書を用いた指導を始めた。一冊の辞書を入口として，自分で答えを探す面白さを知らせると，子ども達は片時も辞書を放さず，興味のおもむくままに学び始めたという。これは，好きなだけ自主的に学べるので，子どもの可能性を最大限に引き出すことができる。一冊の辞書を各自に用意させることから始まる「辞書引き学習法」を具体的に紹介しているのが，(A)の本である。日本語能力の向上は算数，理科の文章問題にも効果があり，総合的な学力向上にも役立っているということである。

この本の中には「複数の辞書を，当たり前のように使いこなす」，「言葉の収録数が多い辞書を選ぶ」，「辞書を選ぶときのコツ」などの項目がある。しかし，どの項目においても，書店へ行って選ぶとか，「購入案内リスト」にもとづいて書店で購入すると書いてあるが，図書館へ行って多くの辞書を使ってみるとか，図書館で自分に合った辞書を見つけるなどの図書館利用の視点が全くないのは残念である。辞書は高価であるから，個人的に複数の辞書を備えるのは難しい。また，種類も

多いので、学校図書館(学級文庫を含む)で備えておき、これを利用するのが、学校教育では重要であろう。

フィンランドは国際的な学習到達度調査(PISA)の読解部門で連続1位を獲得して、最近では日本でも注目されるようになった。その国語教科書の日本語翻訳版が発行された。それが、(B)の本である。この本のシリーズは、この他にも、小学4年生の教科書やフィンランド・メソッド入門などが発行されている。

この本(教科書)は、「ようこそ ひみつクラブとエノの特訓道場へ」というメッセージで始まる。そして、書名の副題には、「対象年齢：9歳以上～大人まで」とある。この部分は日本語版だけにつけられたものようである。本にかかっているカバーの解説には次のように書かれている。

「本書はフィンランドの小学校で使われている国語の教科書を翻訳したものです。もちろん日本でそのまま使えるように翻訳に工夫をこらしてあります。」

「フィンランドの国語の教科書は、五つの力『発想力』『理論力』『表現力』『批判的思考力』『コミュニケーション力』を自然に身につけることができるように構成されています。」

「大人にとっても相当に手ごわい内容になっています。日本の学校では、まったく教えられてこなかったことばかりだからです。」

「子どもが学ぶ場合は、小学校3年生に限定することなく、高学年の指導にも利用するなど、柔軟な対応が可能です。またビジネスパーソンの自己啓発、あるいは企業内研修でも、この教科書はそのまま使えるはずです。」

はじまりにあったメッセージ「ようこそ、ひみつクラブへ！」の意味は、この教科書がバスキマキ小学校3年生の仲間と一緒に、本を読んだり、話し合ったり、発表したり、作文を書いたりするということである。この小学校の物語「ひみつクラブ」の原作は、カリ・レボラという作家によって書かれたもので、この作家の紹介も掲載されている。

フィンランド教育の特色は、図書館が活用されているということである。最近のテレビ特別番組（NTV）と読売新聞でも、フィンランドにおいては、公共図書館利用回数（頻度）が日本の2.5倍もあり、貸出冊数は5倍以上あることがその原動力であることが紹介されていた。それほどに、図書館の果たす役割が大きく、教育効果に寄与している。この国語教科書でも、図書館が最初から登場し、学級文庫の作り方まで出てくる。

そして最後に、まとめでは、学習の過程（流れ）が「物語の型」として解説されている。すなわち、(1)書き出し（問題の始まり—いつ？どこで？だれが？なにを？）⇒(2)問題が起こる（どこで？誰が？何を？）⇒(3)問題を解決しようとする第1の挑戦・・・>失敗（どうゆう挑戦？）⇒(4)第2，第3・・・の挑戦（どうして失敗するのかな？）⇒(5)ついに解決・・・>結び。

このように型（パターン）が具体的に示されていることが、これを使う生徒にとって分かりやすい教科書なのである。このパターンは、JLA図書館利用教育委員会が1988年に策定した『図書館利用教育ガイドライン』の中で、目標としてまとめた「領域」（情報利用能力の到達過程）と同様な考え方であると言えよう。

「ガイドライン」では、領域1「印象づけ」（始まり）、領域2「サービス案内」（図書館利用の実際）、領域3「情報探索法指導」（問題解決への第1の挑戦）、領域4「情報整理法指導」（問題解決への第2，第3・・・の挑戦）、領域5「情報表現法指導」（情報の生産と伝達を行うことによる問題・課題の解決）ということになる。

北欧にはデザインの国と言われるスウェーデンがある。(C)の本はこの「北欧デザイン、ポップカルチャー、絵本などで有名な、アイデアとセンスの国からやって来た創造性を育む小さな本」（表紙の帯のことば）である。情報を集めるのは、新しいアイデアを創造するためであるが、創造することは難しい。模倣することは容易である。いかにして創造性を養うかは、教育・訓練における大問題である。この本は、この課題に身近な話題から挑戦している。

例えば、「創造性の4B」では、多くの人がひらめきやすい場所を4Bとして示している。バー (Bars) , バスルーム (Bathrooms) , バス (Busses) , ベッド (Beds) である。日本でも「三上」と言って、文章を練るのに最もよく考えがまとまる三つの場所として、馬上 (4Bではバスにあたる) , 枕上 (4Bではベッド) , 厠上 (4Bではバスルームであろうか) が挙げられている。

このように、いろいろな場所が挙げられているが、「会社にいるとき」という答えは、聞いたことがないとこの本でも言っている。しかし、理想的な図書館ではそれが可能なのではないか。この話題に関しては、次回に他の本を紹介しながら、考えることにしたい。

(戸田光昭／駿河台大学名誉教授)

(5) 図書館利用教育文献一覧 (2006年6月～2006年10月発行分)

- ・対象誌は次の通りです。
『医学図書館』『学校図書館』『情報管理』『私立大学図書館協会会報』『専門図書館』『大学と学生』『大学図書館研究』『図書館学』『図書館雑誌』『薬学図書館』
- ・この文献一覧の情報は、当委員会委員が現物により収集したものです。内容の誤りや採録されていない文献にお気づきの方は、ご連絡ください。
- ・収録対象期間には多少ずれがあります。
- ・上記の雑誌以外でも必要に応じて採録しています。
- ・一部の文献には解題を付し、担当者の署名を末尾に記しました。
- ・書誌事項の先頭に館種を【大学図書館】【公共図書館】等で示し、館種別にリストアップしました。
- ・◆は利用教育関連文献、◇は少し広く採録した参考文献です。

【大学図書館】

- ◆青山恵里香「学生の図書館の自主利用とその支援 PBL テュートリアル教育を通して」『医学図書館』53(2), 2006. 6, pp. 139-142.
- ◆安藤友張「大学における初年次教育と図書館利用スキル・情報リテラシーの育成ー現状と課題ー」(特集: 大学図書館 2006) 『図書館雑誌』100(10), 2006. 10, pp. 688-690.

- ◆石川敬史「大学図書館の新入生オリエンテーションー情報リテラシー教育への位置づけとして（特集・新入生の受入体制）」『大学と学生』(29), 2006. 6, pp. 33-41.
- ◆岡田孝子「法学情報教育における情報リテラシー概念の必要性」『大学図書館研究』76, 2006. 3, pp. 62-73.
- ◆私立大学図書館協会企画広報研究分科会「企画広報研究分科会とパスファインダーバンクーパスファインダーバンクの構想から運営まで」『専門図書館』218, 2006. 7, pp. 21-27.
- ◆私立大学図書館協会東地区部会情報リテラシー教育研究分科会「情報リテラシーに使える！効果的な媒体の研究ー情報リテラシー教育研究分科会 第Ⅱ期活動報告」『私立大学図書館協会会報』126, 2006. 9, pp. 176-181.
- ◆私立大学図書館協会東地区部会理工学研究分科会「理工系文献検索ガイドانسモデルの研究（研究発表）」『私立大学図書館協会会報』126, 2006. 9, pp. 130-132.
- ◆諏訪部直子「事例報告：医学図書館による正規カリキュラムでの情報検索教育の経験」『医学図書館』53(2), 2006. 6, pp. 143-148.

[内容]

医学部の正規必修科目「医療科学」の中で図書館が行っている利用者教育について、その実際と授業後の反省点を中心に述べられている。授業は、12コマ中10コマを図書館員が担当している。(K.W)

- ◆高多亨「社会人大学院におけるサテライトでの資料調査支援（研究発表）」『私立大学図書館協会会報』126, 2006. 9, 207-217.
- ◆崔相喜著・ジョン リ ヨン訳・編集委員監訳「大学生情報リテラシー指導における分析」『図書館学』88, 2006. 3, pp. 62-69.
- ◆萬谷衣加「視点：大学図書館におけるオリエンテーション」『情報管理』49(4), 2006. 7, pp. 199-201.
- ◆米澤誠「ウェブ主流時代における情報リテラシー教育再構築の試み」『薬学図書館』51(3), 2006. 6, pp. 193-197.

[内容]

理工系大学図書館の利用者教育について、教員との連携にもとづく“学習を意識した”講習会の活動について報告している。特にウェブ主流時代の情報利用者の行動調査から、図書館側でも情報リテラシー教育を再構築する必要性を論じている。

【学校図書館】

- ◆家城清美「中高一貫校における体系的な情報活用指導」（特集：校種間連携・ネットワーク）『学校図書館』670, 2006. 8, pp. 37-39.
 - ◆隅田亜紀子・西田早苗「利用指導に生かす小・中合同の実態調査」（特集：校種間連携・ネットワーク）『学校図書館』670, 2006. 8, pp. 32-34.
 - ◆金沢みどり「情報教育の現状と学校図書館の意義」（特集：変わり目にある図書館）『図書館雑誌』100(8), 2006. 8, pp. 489-491.
-

【共通】

- ◇朴明圭著・岩下康夫訳「情報リテラシーの教育課程モデルについて」『図書館学』88, 2006. 3, pp. 81-88.
 - ◆【図書】毛利和弘『文献調査法：調査・レポート・論文作成必携：情報リテラシー読本』第2版 日の出町（東京都）：毛利和弘 日本図書館協会（発売），2006. 7, 214p.
-
-

(6) 編集後記

電子メール版になって10号目の「通信」をお届けします。今号では、第8回図書館総合展フォーラム講演会のお知らせを掲載しました。関心のある方はぜひご参加ください。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。（春田）

(7) 利用教育委員会委員

(委員長)

毛利 和弘 : 亜細亜大学学術情報課

(委員)

青木 玲子 : 埼玉県男女共同参画推進センター

赤瀬 美穂 : 京都産業大学図書館

有吉 末充 : 京都学園大学人間文化学部メディア文化学科

石川 敬史 : 工学院大学図書館

木下 みゆき : 大阪府立女性総合センター情報ライブラリー

野末 俊比古 : 青山学院大学文学部

春田 和男 : 筑波大学大学院博士課程

和田 佳代子 : 昭和大学歯科病院図書室

久保木いづみ : 日本図書館協会事務局

< C U E > 利用教育委員会通信 第 63 号 (17 卷 3 号) 2006.10.31 発行

・ バックナンバー

<http://www.jla.or.jp/cue/>

・ 配信登録・変更・解除・お問い合わせ

cue@jla.or.jp

※本紙は Yahoo! Groups を使って発行していますが、日本図書館協会および当委員会、ならびに本紙の内容と Yahoo! とは関係がありません。

[戻る](#)